

明治学院大学社会学部附属研究所主催 第20回社会福祉実践家の
ための臨床理論・技術研修会

ー当事者に学ぶ社会福祉実践Part IIー

2006年11月11日（土）白金キャンパスにて、開催しました。

研修会には、基調講演のみの参加の方を含め、123名の方々が受講しました。

●基調講演テーマ：当事者研究のすすめ●

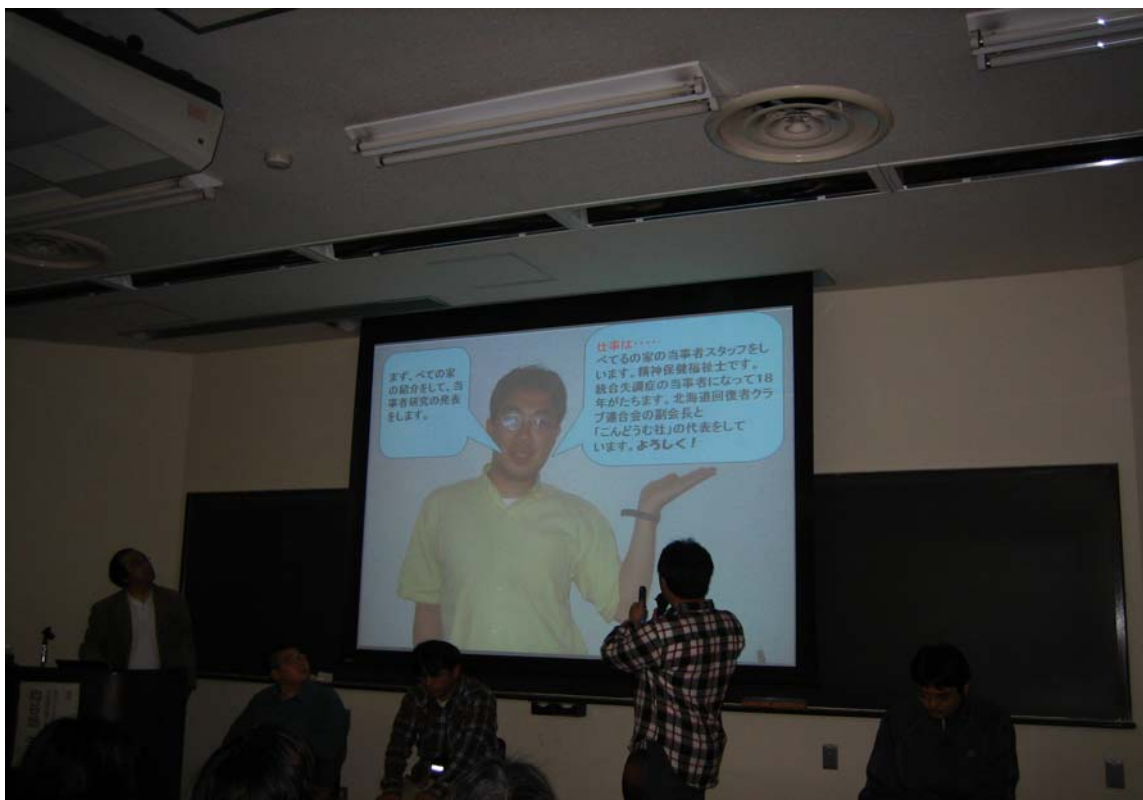
講師 浦河べてるの家理事／北海道医療大学教授 向谷地生良
浦河べてるの家メンバー4名



◆講演される向谷地先生



◆浦河べてるの家より4名のメンバーの方々が講演に来てくれました。



◆講演冒頭、浦河べてるの家の紹介はじまり～



◆北海道浦河町の紹介もありました。



◆「当事者研究」の成果発表が行われました。

＜向谷地生良氏プロフィール＞

1978年3月北星学園大学卒業、1978年4月より浦河赤十字病院医療社会事業部にソーシャルワーカーとして勤務。2003年4月より北海道医療大学看護福祉学部助教授として勤務。

1984年4月に「浦河べてるの家」が発足。

べてるの家の実践により、1997年北海道精神保健功労賞、1999年度日本精神神経学会第1回医療奨励賞、

2000年度若月賞（代表川村敏明医師）を受賞。

活動の内容は、TBS「報道特集」・「筑紫哲也 NEWS23」・NHK「ETV8」にも取り上げられている。

著書等：

「べてるの家の本」 べてるの家の本制作委員会編、「べてるの家に学ぶものー鼎談集」 博進堂文庫

「べてるの家の歩みから」 同時代プロジェクト編、「べてるの家の『非』 援助論」 医学書院その他多数

ビデオ「ベリーオーディナリーピープル」、「シリーズ・精神分裂病を生きる」

＊研修会午後は、以下の3つのワークショップが行われました。

●ワークショップA：難病ALSといきるー当事者と家族に学ぶ生活支援ー●

講師 NPO法人わの会理事長 佐々木公一、デイサービスりんりん施設長 佐々木節子

東海大学専任講師／NPO法人在宅ケアを支えあう会理事長 下西潤子

コーディネーター 明治学院大学 杉山佳子

～ワークショップ案内文より～

筋萎縮性側索硬化症は運動神経が壊れ、そのためにほぼ全身の筋肉が徐々に萎縮して身体が動かなくなっていく神経難病のひとつです。日々の生活を介護者に委ねることになります。

患者である佐々木公一さんにご家族をお迎えし、当事者の思い、家族の思い、

介護者の思いについてそれぞれの立場でお話いただき、生活支援について考えたいと思います。

発症から、告知 患者会との出会い、そして、NPO法人の結成にいたる経緯、具体的な介護における要望、社会制度についてのご意見などをお聞きし、当事者とその家族への支援について今できることについて考えます。

ロールプレイでは文字盤による意志伝達、聞くこと、伝えることの重要性和難しさについて実感したいと思っております。

当事者の発信を通して支援の輪は次第に広がっていますが、より利用者本位、自己実現を目指す社会福祉実践のために、学びの時を持ちたいと思います。

●ワークショップB：日常に潜む虐待について考える●

講師 スタジオIL文京 村山美和、他1名

コーディネーター 明治学院大学 森玲子

～ワークショップ案内文より～

自立生活センターは、障害を持つ者自らが運営する団体です。重い障害があっても住みなれた地域で安心して暮らしたいとの想いを実現するために活動しています。

スタジオIL文京は、ピア・カウンセリングや自立生活プログラム、介助者派遣365日、24時間などの様々な活動を通じて、同じ地域に住む障害を持つ者、持たない者がお互いの交流を深め理解し合いながら、より住みやすい地域づくりを目指しています。

ワークショップ『日常に潜む虐待について考える』は、日常、施設などで当たり前に見られる光景のウラにある支援者の“なにげなさ”について、考えるワークショップです。具体的なロールプレイを通じて、支援者のかかわりが、プレッシャー、不安を巻き起こしているかもしれない現実について、一緒に考えます。

●経験者から学ぶ病気の子どもへの生活支援

講師 小児がんネットワークM^{みんななかま}N プロジェクト代表 小俣智子

コーディネーター 明治学院大学 平野幸子

～ワークショップ案内文より～

子ども時代の大きな病気（例えば、小児がんや慢性的な疾患、後遺症を残す疾患など）の経験者たちは、治療の日々を過ごしながらか、どんなふうにな成長していったのでしょうか。治療のために、勉強に十分にとりくめないあせり、お友だちに会えないさびしさ…なによりお父さんやお母さん・きょうだいと会えないつらさ、そして、将来への心配や死のことも頭をかすめたかもしれません。子どもの親も、療養生活を支えるために様々な生活課題を抱え、きょうだいも病気のきょうだいを支えるために我慢したり、淋しい想いをしたり。子どもの病気から派生する生活課題は、子どものおかれたライフステージによって異なるものの、成長と並行して行われる治療やその苦痛、将来への影響の不安、親やきょうだいなど取り巻く人々の生活課題でもある点で、多層的重層的です。

現在経験者によるセルフヘルプグループを起点に、子どもの病気に伴う課題について社会への発信を試みる小児がん経験者から、大きな病気に立ち向かう子どもやその親、きょうだいへの生活支援のあり方について学びたいと思います。